

## 分離としての「障害」

加賀谷 一<sup>\*</sup>

「障害」とは何だろうか。手が動かないことだろうか。物がつかめないことだろうか。言葉がうまくしゃべれないことだろうか。新聞の字が読めないことだろうか。両眼の視力が0.1以下のことだろうか。顔に大きなあざのあることだろうか。人見知りがはげしくて人前にでられないことだろうか。問いかけはどこまでも続けられそうである。

現に世界各国の「障害」の定義の多様さをみれば、「障害者」数の単純な比較など何の意味もないことは目に見えている。

あるいは、どのように客観的な定義をしたとしても、本人がそれを「障害」だと感ずるなら「障害」の幅は人の数だけ実際にあるということにもなる。

例えば、私の腕が急に動かなくなった。医者のところに行って治れば幸いである。しかし、治らないといわれたらその腕と私はずっとつきあっていかなければならない。そしてもし、それが重症で日常の用がほとんど足せなくなれば、私は「障害者」ということになる。

これは、外からみてそう思われることである。私の中では、たぶんそれとは別のことが起きている。

それは簡単にいえば分離ということである。「障害」は単独で起こるもの、それ自体で存在しているものではない。それは関係性の中で生じてくるものである。

ここでは「障害」と呼ばれるものが、どのようなことを意味しているのか、「障害」を定義するのではない、この言葉の意味するところを「分離」ということを通して解き明かしてみたい。

### 1 対立的分離としての「障害」

私の身体が不自由になる。そのことは私に何をもちたらしめるのだろうか。その時、私たちの中にどのような変化が生じているのだろうか。まず、それは私が私の身体と一体ではなくなっ

---

<sup>\*</sup>総合福祉学部 教授

た（分離）ということである。

しかしこれは、その身体が私のものではなくなった、ということの意味するものではない。その身体は私の意のままに動かなくなってしまったが、しかしそれでもなお私の身体であることに変わりはない。すなわち、「障害」は単なる身体機能上の変化ということにとどまらない。それは私自身における分離を意味している。

では私の身体が私の身体ではなくなった、ということは何を意味しているのだろうか。それは私をして身体を意識させる、すなわち対象として浮上させる、ということである。

しかし、この対象化は意識の本質的出来事であり、それ自体が問題とはならない。距離をおく、ということなしに私も存在しえないし、認識や思考も生まれない。したがって、私における分離、社会との分離そのものはけっして否定されものでもないし、それ自体不都合がある、ということではない。単なる対象化は、さらなる統合、より深い理解へとつながっている。

それゆえ、「障害」は単なる対象化ではない。それは分離あるいは対立としての対象化である。この点が、単なる対象化としての科学的立場とは根本的に異なる。

確かに身体だけをみればそれは状態の変化であって、そこに対立は存在しないし、障害という概念（価値観）も生まれる余地はない。ICFにおいては「制限」と名付けられている状態がそれである。障害とは自然科学的立場からは生まれることはないし、そもそも「障害受容」という問題も生じないことになる。すなわち、身体における分離（「異常」）はただちに「障害」を意味するわけではない。

では、どのようにして、対象化（状態の変化）が分離、対立（「障害」）へと移行するのだろうか。ここに一般的には「障害の判定」と呼ばれている一見科学的な過程が登場する。あるいは特にリハビリテーション医学と呼ばれる分野の役割がそれにあたる。

すなわち、この判定によって、「障害」は外的な存在、私と切り離された、客観的对象として現れることとなる。客観的立場からすれば「機能障害」と呼ばれているものがそれにあたる。

このとき重要なことは、それによって「障害」がそれ自体としてあたかも存在するがごとく思いこまれることであり、リハビリテーションが「障害」がそれ自体存在しているように仮想して、「障害」の科学として「障害」当事者に影響を及ぼすこととなり、それによって新たな受容の問題が生まれることになる。

## 2 私における分離・対立

分離・対立のあり方は、その対象のあり方と私の関係においてさまざまな違いが存在す

る。身体を例にそのいくつかを列挙し、「障害」とはどのような分離のあり方かを検討してみたい。

① 怪我という分離（体の一時的異常・危機＝私（自身）の危機ではない）

たとえば、爪が割れる、割れたガラスで手を切る、捻挫をする、といった場合、それによる身体の異常は一時的であればそれを「障害」と呼ぶことはない。なぜならそこではまだ自分と身体との分離は部分的であり、私の全面を覆ってはいないからである。

② 病気という分離（私全体の死への接近）

私の命の危機。私の命が損なわれること。私は特別な状況にある。それは、死というものに関係している。この場合には分離は死を通してこの世との分離として示される。しかし、この場合も私自身の内部における分離は存在しない。

③ 「障害」・不自由という分離（私の同一性が損なわれるということ＝私（自身）の危機）

「障害」であること、それは私の中で、不自由な「私」がいることである。このことはだから自分から離れた体の問題にとどまらない、重大な意味をもつ。

ではなぜ「障害」は私・人格の危機をもたらすのだろうか。「障害」が私において最初にあらわれる仕方というものはどのようなものだろうか。

### 身体的分離・対立

身体における分離とは、私と切り離された「もの」との分離ではない。身体がそれ自体の存在を主張する、という意味での分離であり、いわば私の中のもう一人の「(身体としての)私」が浮かび上がることである。だからこれは厳密な意味での対象ではない。それは私につきまとい、隠されつつ、外にありながら内に存在する準対象に他ならない。それは私でありながら一方で自然的過程として、私における疎外された私として浮かび上がる。

しかし、ここで明確にしておかなければならないことは、「私は私の身体ではない（それは自然によって規定されている）」ということである。私の中にもう一人の私（「もの」あるいは自然的存在としての私）がいる。あるいは、分離された、分裂したわたしが存在する。そのどちらも、私である。

この微妙なものとしての、自然としての、しかし外部でない内部の自然を、市川浩は「身」という言葉で表現している。それは、単なる自然でも、外部ではなく、「内部における外部、内部における自然、私と切り離すことのできない外部・自然」である。その自然がいまや私の意志をこえた自然としてあらわれ、対立している。

自然ということばをここで使うのは、それは一方では外部として、そして他方ではそれが

「自然」つまり「ありのまま」という意味がふくまれている。それは対立としての「自然」であるが、また当然のこととしての「自然」でもある。わたしたちはそのような「自然・身」をもともとのかかえた存在である。

しかしことはまた積極的意味において、「身において「障害」が露わなり、それが意識化され、意識の対象となること、それはまた私が「障害」を超越し、「障害」から自由であることのあらわれでもある」ということをも示している。

ただし、「身」は自然としての存在を含む両義的存在であり、それは自然科学でいうところの因果関係にしたがう身ではない。ここでは、そのような混同あるいは単純化をしないようにとりわけ注意しなければならない。

すなわち、哲学でいわれるところのカテゴリーのミスを犯さないように注意しなければならない。(心身問題がここで関係する)

### 3 社会における分離 (外的な分離)

「障害」が生まれつきの場合には、私の中における意識と身体との分離は存在し得ない。なぜならその意識においては、最初からその身体において意識が存在しているからである。

しかし、「障害」が生まれつきの場合においても、その分離は社会、環境との分離によって生じる。それゆえ、その環境がどうであるかが、彼らにおける「障害」のあり方を規定する。

ただしここで注意すべきことは、身体の対象化が分離としての「障害」を直ちに意味しなかったように、ここでも社会の対象化、分離は必ずしも、「障害」における社会との分離とは同じではない、ということである。

また、私は社会ではない、ということにも注意しなければならない。確かに社会は私を育み、私に私を映し出し、私が何者かを教える。ただ、それは他者に映じた私であって、そこに私の、内面の私がいるわけではない。私は社会の中にいながら社会をこえた存在である。

ここで問題となるのは、私と社会との関係である。歴史的に言えば、ソクラテスに代表されるギリシャ人は人間の条件をポリスにおいていたし、ポリスと私は強く結びついていた。その中でギリシャ人は優れて個性的であり、独創的であり、同一性を保っていた。しかし、とりわけ私たちの時代にあっては、むしろ個であることは、社会との間に溝ができることを多少なりと意味している。私たちはその上に立って、社会と個との分離という全体を見据えながら、「障害者」と社会との分離も考察しなければならない。

この意味で、私たちは「障害者」における分離の仕方の特徴として非対称性をあげることができる。すなわちこれは、一方から見てそれが同じように他方から見られるという構造を欠いている、ということであり、「健常者」→「障害者」と「障害者」→「健常者」の関係

が非対称性・否定的分離を含んでいる、ということである。「障害」をもった人に対する時、私たちは自分のところが見透かされる、という感情・恐れをいだくのも、この非対称性のゆえである。

ただし、進行性の筋ジストロフィーのような場合には、そこに二種類の分離（自己と社会における）が生じる。

しかし、ここでも私たちはこの社会における分離は同時にその強い結合がそこに含まれていること、分離は同時に結合を前提としていることを忘れてはならない。それは、私は社会において存在している。社会を離れて私は存在しない。私は社会によってはぐくまれる。社会の影響を受け、それを受け入れまた反発しつつ生活している、ということである。だから、それは「社会との分離」ではなく「社会における分離」といわなければならない。

では具体的に「障害」は社会の中でどのような形をもって浮かび上がるのだろうか。「障害」をもつことは、「障害」自体があって、それが何かを引き起こす、ということではない。それはさまざまな接触における分離の総体に他ならない。

#### ① まなざしとその傾き

私は内的に自分自身を感じ、自分の存在を確認することができる。しかし、私は同時に身体をもち、それは他者にさらされ、まなざしのもとにある。私はそのまなざしを避けることはできない。なぜなら私は身体でもあり、見られる存在でもあるからである。

この意味で身体をもつ、ということの意味は大きい。私たちが他者を認識するのは何によってであろうか。他者は皮膚を通して、音を通して、そして何よりも視覚を通して訪れる。何よりもまず、「障害」であることを知らせるのは視覚においてである。

ではそれはどのような視線だろうか。相手を見つめる、それは時に親愛の情であり、引き寄せられることである。それは時として相手をものとして見つめ、正面からではなく、斜めから相手を盗み見る視線である。

「知的障害者」の女性が、海外に出かけた時に、日本にいる時と違うのは、視線が違うということだ、と述べていたのを聞いたことがある。海外では視線はただ見ることであるが、日本では見ないようにしてじっと見ている、と感じる。それは好奇であり、ものとしてみている、ということだろうか。

この視線の意味を象徴的に示しているのが、脳性麻痺者の団体「青い芝の会」のドキュメント映画「さよならCP」の冒頭場面である。そこではカメラを手にして、いつもはじろじろと視線をなげかけられる「健常者」に、逆に「CP」がカメラを向ける場面が登場する。

この試みは結局、他者との分裂を回復することはなく、映画は当事者自身が自分の行為に

対する疑問のことは「自分で自分が分からなくなった」という言葉で終わっている。ただそこで提起されていることは「障害」と視線の深い関わりである。視線によって「障害」は気づかされる。

ここで注意すべきは視線があって、そこから「障害」が気づかされる、ということではない。その視線のあり方自体がすでに、「障害」の存在を浮かび上がらせている、ということである。

しかし、改めて言えば当事者はその内部で分離しているのではない。冷やかな視線・分離の視線を向けられるが、その内側において分離しているわけではない。「障害者で何が悪い」と「青い芝の会」の彼・彼女らは主張し、映画ではその視線を跳ね返すこと、それは逆に視線を「健常者」にあげることとして示されている。

この点、安積遊歩のとした行動は『障害者の日常術』（晶文社）によれば、視線をもちやほねのけることでも、拒否することでも、抗議することでもない。ただ、自己の同一性を生きることである。対他としての私ではなく、対自の私として生きることである。だれもが生きるその本来の自分を生きることである。何も他人を気にすることなく、生きることである。

ここでS. スピルバーグ監督の映画「スターウォーズ」に登場する異星人の場面を思い出すこともできる。その地球人と異なる容貌をもつ知性体（宇宙人）は何はばかりことなく、画面の中で生活を楽しんでいる。ここではいわば「宇宙的観点」から生命体が捉えられている。これは考えてみれば、現存する地球上の生物の多様性、人間もその一部であることを思えば、あたりまえのことかもしれない。

しかし、ここで考えなければならないのは、そのよう「なまなごし」を生む社会とは何か、その契機はどこにあるのか、ということである。「まなごし」にこめられた分離は社会の本質的部分をなすのだろうか。それは社会の中における、普遍的な孤立・単独者の問題とどのように結びついているのだろうか、という問題である（どこかに分離から本質的に逃れている社会はないものだろうか）。

次にこの社会における分離を身近な場面で具体的に考えてみたい。

## ② 比べることと分離

不便であることはただちに「障害」ではない。老眼になって見にくくなる、といってもそこに差別や「障害」がただちに存在するわけではない。ではどこから「障害」はうまれるのだろうか。それは「障害」によって、「障害者」と「健常者」を分けることとしての差別によってである。人間どうしにおける分離によってである。

中途「障害」として盲と聾の二重「障害」を受けている福島智の場合、「晴眼」の生活を知っ



ており、そこに内部において比較ということが生まれている。そしてその経験によって盲との比較ということが生じる。

ここで對他における「障害」は、「差異」という形で現れ、気づかされる。それは外からみた私の「障害」である。障害をもたらすもの、それは生活していく上で否応なしに気づかされる不便である。たとえば生産と労働、住まいにおいて、町において、「障害」は実感として感じさせられる。それは私たちが、「健常者（晴眼者）」を中心に一定の環境において住んでいる。住むところをもち、生産を行う。集団と文化において生きていることによっている。

#### 4 統合と回復

統合とは私が全体の一部になることではない。分離をへてより高次の統合、回復をなしとげることである。しかし、私と全体は完全に統合されることがあるのだろうか。あるいは私における統合と私と社会の統合はどのように結びついているのだろうか。それは本質的に分離されているのではないか。「障害」による分離はその最もあからさまな現れではないのか。

たとえば、電車に設置されている優先席の強制制度化はその内容によっては、逆に分離を強めることもあるが、それが一定のハンディをもつ人の保護に効果があることも否定できない。問題はそれを通過点として、全ての席が優先席になるような仕組みをつくれるかどうか、ということである。

ではどのようにして、そのように分離は再び結び合わされ、より強く結びつくこと。すなわち高次の統合に至ることができるのだろうか。「障害」の受容とは本来そのようなことではないだろうか。この場合、考えなければならないことは、意識は「因果性によって成り立つのではない」ということである。すなわち「障害は因果性によって説明できない」ということ、すなわち「もの」としての身体は因果性によって説明されるかもしれないが、私における分離からの回復、あるいは「障害の受容」・統合は因果性によっては説明もできないし、実現できないということである。

\*疾患や異常がただちに「障害」を意味しないことはICIDHにおいてすでに明らかにされているところである（疾患と機能障害の区別）。しかし、それは能力や社会的不利という側面からの話であって、当事者の内面で起きていることを示しているわけではない。

この点においてICFもその構成要素が多様化し、環境や個人因子を加え、また相互作用をとりいれてはいるがその基本的立場は物質を対象とした自然科学で用いられている因果関係（あるいは様々な要素の複合的影響）によって「障害」を規定しようとする立場に立っている、とみることができる。

### 1) 私における統合

私は私である、という原点が存在する。あるいはどのように変化したとしても、それは「私の変化」であり、これはどのような状況にあっても失われることのない原点である。いかにすれば「同」は変化しつつそのあり方・根底において変わることがない、ということである。

したがって、私はいってみれば「障害」によっても失われることはないし、私の回復ということもこの意味においてそもそも本質的にあり得ないということになる。

しかし、現実には私は損なわれ、私は分離している、という事実がある。だが注意すべきは、ここで生じていることは、喪失ではなく、分離であるということである。分離とは失われたこと、死ではなく、一つである存在が別々に切り離され、存在している、ということである。

「障害」によって私の身は、私の身でありながら私の意のままに動く身ではなくなってしまった。しかし、私はやがてその身を受け入れる。その身を自らの身として受け入れる。これが「障害」の受容の意味であり、この場合においては「動かないこと」が自然の状態になる、ということである（先天性「障害」の場合は、ここから出発する）。そしてそれが新たな自分の身になる、ということであり、これが「障害」の受容の本質に他ならない。したがって、それは回復ではなく、新たな自分との出会いである。

しかし、ここで注意すべきは分離を克服する、同一性を回復するということは、決して分離的自己が融合してひとつの存在となる、ということではない。もし回復ということがそのような融合を意味するなら、そのとき同は意識としての存在をやめ、ひとつのものと化してしまうに違いない

すなわち、私は「分離」において同一性を回復しなければならないのであって、それは他を抹消することによって成し遂げられることではない。

ある意味で、受容とは距離をより多くとることでもある。私自ら距離を私のものとしての「障害」との間におくことである。

私は身において身と分離しつつ、つながっている。「障害」は私にとって単なる対象でも分離でもない。それは否定しようのない事実である。あるいは、このことは現実のこととして、「障害」を単に否定することではない。生きることの希求と、避けられないこととしての「障害」を見つめることを通して自己を回復するということである。

この一例としてかつてNHKで放映された「生命のきずな：ある筋ジストロフィー女性の出産」における主人公である女性の問いかけがある。

このドキュメンタリーは筋ジストロフィー症という遺伝的疾患を抱えた一女性が子供を出産後、その子に自分の疾患を発症させた遺伝子が受け継がれているかどうかを確かめるた



め、遺伝子診断を受けるかどうかで困惑し、悩む過程を取材したものである。そして悩む自分をふりかえり、悩む自分を「今さら、検査を受けさせることを心配するなんておかしいと思うかもしれませんが……おかしいですね。でもその子をどんな状態であっても受け容れるということに迷いは全くありません」と語っている。

ここには出世前診断という選択に直面して、「障害」を肯定している半面、我が子が「障害」をもって生まれることは、心の底から避けたいと思う一見矛盾した母親の思いが交錯している場面が映し出されている。「障害」が無いようにという願いを否定することはできない。しかし、それでも「「障害」をこえた、「障害」によって変わらない自分を見いだすことはできる、とその女性は語っているのである。

それは、価値の転換というより（真実の）私の発見・確認である。これは阪神大震災で我が子をなくし、そのことがずっと心から離れられない母親がある日ふと青空を見て、その出来事から解放され、「肩のからぼろりと荷が落ちたような気持ち」を経験したこと通じている。たぶん、それは「天国」の子供が「お母さん、もう心配しなくていいよ、僕はもう大丈夫だよ」といつてくれたからだろうか。

「障害」を超越した自分を米国留学におけるパークレイでの重度障害者の自由な生き方の中で学んだ安積遊歩においても、それは同じである。それは人々は身体（「障害」）のために生きているのではないし、身体が目的でもない、あるいは身体はそれぞれの人において「障害」のあるなしにかかわらず同じ価値をもつ、ということである。

## 2) 他者との統合（人間的平等）

ここで他者との統合というのは、他者に「障害」について理解をもとめる、ということではない。人間として対等の関係を築くということである。それは「さよならCP」の主張であり、「障害者で何がわるい」ということであり、「同じ人間として見てほしい」という「障害者」のもっとも望むことにかかわっている。

このこと、すなわちこの私における統合とは具体的には他者の「まなごしを越える」ということによって示される。

例えば「障害」児をかかえるある母親は、その子が「障害」をもっていることを受け入れられず、人目を避けるようにして暮らしていた。ある風と雨が強い日、自動車から外に出ようとした我が子が、「障害」で不自由な身体で懸命に傘をさそうとして、必死に傘を握りしめているのを見て、その真剣に生きようとする姿を見て心をうたれ、それからは人目を気にせず、自由に「障害」について、誰とでもわだかまりなく話すことができるようになった、という話を聞いたことがある。それは母親において我が子を認めることであり、分離の回復あるいは自己の同一性が取り戻されたこと、「障害」の向こうにあるその子自身の発見を物

語っている。

もちろん、まなざしを向ける他者に対して、「まなざされるもの」のできることは、それに異議をとなえることかもしれない。たとえば端的に「そのようにじろじろみることはやめなさい」ということもできよう。

しかし、基本的に私のできることは、そのような視線を意に介しない、その支配する力に左右されない、ということに尽きるのではないだろうか。そしてそのような姿勢が、社会における価値観を変えていくもっとも根元的な原動力になるのではないだろうか。

なぜならそれは、「説明する」、「障害」について「ころおきなく話す」ということを可能にするからであり、他者と彼との間の溝、へだたりに言葉の、態度の架け橋をつくるからであり、同じ人間として確かに存在しているという事実を伝えるからである。

あるいは米国の車いすダンサーの演技をみた観客が直接「舞台を見ているとき、車いすが目に入らなかった」と感想を述べたのもそのことを示している。それは彼女が舞台においてダンサーであることの証であり、「障害者」以前に同じ人間であることを、事実をもって示している。

しかし、この他者の背後にはさらに社会という大きなシステムが存在している。他者と私はその中あるいはその上に存在し、それと切り離せないものとして存在している。ではそれは「障害」が存在することにおいてどのような役割を果たし、意味をもっているのだろうか。そしてそれを乗り越えること、社会における分離の回復とはどのようなことだろうか。

### 3) 社会との統合「私の回復と社会における回復」

私における回復は、私の内における回復であって、本来の同一性を取り戻す、ということである。しかし、社会における回復、社会とのあるいは社会関係における回復はそれとは本質的に異なる面をもっている。すなわちそれは外部との関係における回復であり、必然的に対他と対自という関係に関わっている。

では社会それ自体の内部における分離とは何か、また何によって、いかなる原理によって克服されるのだろうか。そのような社会のあり方について考えてみたい。

社会と個人が統合され、その間に何の衝突も対立も存在しない社会、おそらくそのような社会を目指して、人類はユートピア、理想の共同体という姿を通して、その高次の、究極の統合に思いをはせてきたのではないだろうか。蟻や蜂の完全に組織化された社会ではない、社会と個人が矛盾しない社会システムを探し求めてきたのではないだろうか。バリアフリーということも、そのような統合の一部であることは間違いない。しかし、真の統合とはどのようなことだろうか。本当にそのようなことは可能なのだろうか。「障害」における分離の

解決は、そのような社会の試金石となるのではないだろうか。

まず見ておかなければならないことは、「障害」に対する評価は決してこれまで決して不変であったわけではない、ということである。ある社会においては、「障害」は排斥や軽蔑ということに結びつくが、また同時に尊敬・おそれ・超越の対象でもあった。たとえばよく知られている例では画家山下清の生き方や絵画が人をひきつけ、「知的障害者」に接することで、すがすがしい気持ちになる、彼らはうそがないから、ということで喜んでボランティアに参加している人がいる。

さらに「てんかん」や分裂病が、古代ギリシャにおいて「神聖病」と呼ばれていたこと、「障害」がただ否定されるものではなく、まれな人間の日常を超越した、何か積極的なものの存在を見いだしている、ということを見ればそれが一概に、差別や侮蔑の対象となってきただけ言うことはできない。もちろん、だからといってそのことで「社会が「障害」を受け入れた」と即断することはできない。それは異能として、高い評価がえられたとしても、社会からの分離、特別視であることに変わりはないからである。

だから、正確に言えば「障害」による分離の解消とは、「障害」のままで、同じ人間として接してもらいたい、ということになる。ただし、それは社会の中に、全体の中に同一化される、ということと同じではない。一人の人間、その人格や考え方も異なる、個性のある存在、「障害」があっても、同じ人間として認めてもらいたい、ということである。だから、それは何の矛盾も、対立もない世界を実現するということとは本質的に異なる。

またそれは決して、外的なバリアフリーの実現と同じではない。法的な援助法や人権宣言、差別撤廃法の確立と同じではない。それは人間の内面・価値に関わる問題である。

ここで少し、以上の観点から米国に発する自立生活運動について触れておきたい。そのよく知られている主張は「障害者を変えるのではなく、社会を変える」ということである。しかし、このことは単に社会の物理的環境あるいは社会制度を変えることに留まるものではないだろう。その底にはそのような社会における「人間の価値観を変える」ということが含まれているのではないだろうか。その言わんとするところは「同じ人間として、その人間に合った同じ環境」を実現してほしい、ということである。この意味で、障害者の願いである自立運動は、「健常者」も含めたその一員である社会の環境を変えてほしい、ということである。

問われなければならないこと、それは言葉を継ぐならば「人間として見てもらいたい」であるだけでなく、「同じ人間として」「普通の人間として」ということである。ではそのよう

は主張を成立させる理論的根拠について考察してみたい。

### ① 心身二元論と「同じ人間として」の立場

「同じ人間として」つまり「障害者」と「健常者」がなんら変わらない存在であることを原理的に証明しようとするなら、二元論（精神と身体の独立性）という立場について考えなければならない。すなわち身体と精神が相互に影響を与え、社会が身体と相互的に存在しているという一元論（あるいは全体論）は、身体と精神のあり方、関係の仕方、両者の境界を曖昧にすることによって、「障害者」の「同じ人間として見て欲しい」ということの真意をくむことが出来ない限界をもっている（身体的に劣っている→人として「劣っている」という論理）。

あるいは二元論からは次のようなことが導き出される。すなわち精神と身体の関係はベルグソンの言うように因果性によって説明されるものではないこと。さらに身体によってではなく、「精神も」あるいは精神において正当に評価されなくてはならない、ということであり、これは実際にさまざまな身体に障害をもつ人たちの優れた精神が示しているところでもある。

問題はこの二元論の上に立ってさらに精神と身体関係を明らかにすることである。人間のもっとも人間的な核心、その由来・その源泉を理解することである。

すなわち、これは、身体を通して精神を見なければいけないのではない、ということとも異なるし、また精神を通して身体を考えなければならない、ということでもない。その両者を分離しつつ、どのように統一的に考えることができるか、という問題である。

この点で、精神と身体の新たな関係を示唆しているものが、キリスト教の新約聖書の解釈である。それによれば、キリストは完全な精神であり、また受肉した完全な身体をもつ人として描かれている。この二重性を宗教的な意味をこえて考察すれば、そのような両義的な存在として人間を理解することが重要である。なぜならそのことによって人間は身体のあり方にかかわらず、本質的に同じであるということの意味が明らかにされるからである。

### ② 「価値の転換」と社会の原理

社会における「障害」による分離を根本的に解決しようとするならば、私たちが必要としている理論や枠組みとはどのようなものだろうか。まず、リハビリテーション医学において我が国を代表する論者である上田敏による「目で見えるリハビリテーション医学」は「障害」受容において、個人の価値観の転換を提唱しているが、「障害」の全体的解決において重要なのは社会における価値観の転換、もっというならば社会における労働価値を中心とした経済原理の転換ではないだろうか（この中には労働をこえた交換の原理が存在できるかという、マルクス経済学の基本命題に対する再検討が含まれている）。すなわち、人間の価値を何よりも経済的価値を中心とした「利益・メリット」によってはかるのではなく、メリットシス

テムを越えた価値観とそれによる社会システム理論の可能性が検討されなければならない。なぜならメリットによってその労働（者）の価値が決まれば、当然そこに差が生まれ、さらに差をつけることで競争が生まれ、社会の中に分離が生じ、分離によって社会が成り立つようになる。最近の例をあげれば、業績による評価がそうである。そしてその結果、他方では、メリットの低い、働きの悪い者に対しては低い生活でいい、という考えも生まれてくる。そのようにみると、この制度その本質において、格差や待遇の差別を内包しているとみることができる。しかし、ではそのような分配の仕方が果たして不公平だと言い切れるのだろうか。

これは結局、平等ということの中味に関わることであり、価値の転換という問題にもかかわる。人が働いただけ収入をえる、働きにに応じて収入をえる、そのことが平等なのか、働いていること（努力）自体に意義があり、みんなが成果にかかわらず同じ賃金、生活を営むことができることが平等なのか、ということである。後者の原則が受け容れられるためには、人間における比較する、働きの「悪い」人間が同じような収入を得ることへの妬みの感情が克服されなければならない、という問題がある。

このことはおそらく平時にはそれほど問題とならないかもしれない。しかし実際には物資の不足した第二次大戦中の「障害」者へのひどい仕打ちを考えれば決して人ごとではない。公然と「米食い虫（ごくつぶし）」とよばれ、のけものにされた「障害者」がいた事実を私たちは忘れることができない。社会の生産力が上がれば、さまざまな人が生きる余力も生まれる。そして「障害」をもっているからといって、差別されることも少なくなる。一人一人の分け前が少なければ、それを奪いあう社会が生まれるし、生産が高くて余力があれば奪い合うことも無くなるし、働けないからといってのけ者にされることもない。しかし、これは具体的には財源の問題だけではない、むしろ分配の問題である。福祉の問題といえすぐに財源の問題がとりあげられるが、重要なことは全体の分配と、その公平性をどこまで保てるかということ、何を重視してその財源を使うのかということが大きく関わってくる。

だが、「障害」の問題は、ただ財源の問題につきるのではない。それは倫理的な問題に深く関わっている。人間において生命、生きる権利とは何か。本当に全ての生命は平等なのだろうか。それとも、そこに差はあるのだろうか、という問題がある。

ここで重要なのが人権の考えである。人間は等しくその人の収入や地位や容姿などに関わらず、人間としての権利をもっている、という考え方である。その理念が文字通り実現する時、「障害」問題も解決することは疑いえない。それは内容から言えば、先に挙げたメリットシステムをこえたシステムが実現できるかどうかにかかっている。またそのような社会が本当に平等であるということが、人々の間で受け入れられるか、ということにかかっている。またそのような新たなシステムによって、経済が発展するか、維持されるか、というこ



とにかかっている。あるいはその新たなシステムが、全体として人々の生活に大きな利益と精神的満足をもたらすことができるのかどうか、ということにかかっている。

### ③ 「障害者」自立支援法とA D Aの限界

障害者自立支援法は「障害」者を前提に、つまりそのような存在があることを前提に、「正常」な社会の原理を認め、そこに適合できるように求め、あるいはそれを目標としている制度である。米国の「障害のあるアメリカ人法」(A D A)にしても、その差別禁止は能力の等しいものに対して差別的待遇を禁止するものであって、その能力の違いによる差別は合理的なものとして認められている。

しかし、それでは「障害」を持つものは必然的に差別される可能性が高いし、きわめて一部のものにしか就労の門は開かれない、ということになる。これは現在の制度が労働そのものでなく、その経済的利益にもとづいて労働を評価しているからに他ならない。

だから、もし「障害者」と「健常者」を区別する経済的利益によるメリットシステムが捨て去られるなら、その区別・分離の大半は意味を失うにちがいない。

これは現在の福祉制度において能力の不足分を福祉が補い、そのことによって平等を達成しようとする考えとは根本的に異なり、その原理にさかのぼって問題の解決を図ろうとするものである。そこではすでに補填(マイナス部分を補う)という発想は無い。そうでなくて、そもそもそのようなメリットを中心とする原理は現在の社会における原理であって、それは決して普遍的な原理ではなく、歴史的にある一つの社会(資本主義社会)において成立しているにすぎない。メリットではなく、別の原理。補填ではなく、働きにより利益ではなく、働くことそのものによる社会。そのような社会に徐々に移行することは決して空想の世界とは思われないし、それ以外に真の「障害者」と「健常者」の分離が解決されるとは思えない。

だがここでもう一つの問題がある、それは「障害」についていうなら、メリットを越えるということは、経済的価値に限られるものにとどまることはできない、ということである。それはひろく外形にかかわるあらゆる価値の転換に及ぶことを考えなければならない。容姿や容貌の美醜を越えた価値が見いだせるか、あるいは破棄できるか、あるいは越えることができるか、という問題がある。

たとえば多くの電車には優先席というものがある。本来あってはならないものだろう。全ての席が優先されるべきものだろう(ただし、それはあくまで強制でなく、道徳的問題として扱われなければならないことにも注意すべきである)。「障害者」という言葉も、統合が達成されるなら本来、不要なものとなるにちがいない。もともと「障害」をもたない完全な人間などほとんどいないに等しい。だから元来、そのような言葉は意味をなさないはずである。ではなぜそのような言葉が使われるのだろうか。そこに「障害」という形の分離が存在



する究極の理由が存在している、とみることはできないだろうか。

ここで立てられる問いは「障害者はあってはならない存在なのだろうか」ということである。出生前診断の結果による中絶、健康な子供を持ちたいという母親の願い。それは無視できるのだろうかという問いである。さらにいえば生まれる前に、その子の知能が分かれば、選別がされるのではないか。それは際限がない要求をうむかもしれない、という不安がある。しかし、もはや自然のままにまかせることはできない、という時代の要請と問題の困難さがある。

ここで私たちはあらためて「人間の命とは何か」という問いに直面する。それは絶対的価値をもつのか。それは相対的価値に過ぎないのではないか。全体のシステムの中でその生存は規定され、社会の生産力によって規定されているのではないか。分け合うことはできる、しかし、一方で限界があるのも確かである。一人のために膨大な医療費を使うことはできない。すなわち、「障害」者を生むことは結局は彼を支えることがどれだけ可能か、社会が受け容れることができる生産力（余力）を持てるか、という物質的なことに帰着するのかもしれない。

ただし、この財源の問題にしてもその底には全体の問題、すなわち分配の問題があることを見逃してはならない。しかし、そのような合理的な分配がなされることと、その命を救わなければならないことは、全く別のこと、別のカテゴリーに属することである。それは義務に関する倫理的問題である。そのことが根底にある。

#### ④ 「障害」当事者に対する非対称性

これまで、分配についてみてきた。しかし、一定の有限な資源を分配する場合に、それがさまざまな要求によって修正を受けるということが考えられる。そしてその場合その必要性を訴え、アピールするという行為がどうしても介在すると思われる。この点において、問題となるのは「障害」を持つことによる立場の非対称性ということである。「障害」はその当事者の主張を伝えるににくいものとしているかもしれない、特に胎児の場合はその意見の聞くと言うことは絶望的である。（まさか、死にたいと望むものはいないが、中絶は一方的になされる）。そうでなくても、身体的に「障害」のある人の場合には、例えば介助を要する場合には、その立場の非対称性は無視できない。「健常者」は長い目でみれば別だが、とりえず自活できるし、他人の介護を今のところ受けないかもしれない。

だから、もしカントの定言命法のように「自分がしてもらいたいように、他人にしろ」という原理を、そのまま現実にあてはめることができるなら、倫理的にはこの問題も原理的には解決されたということになる（現代においてはなおさら）。

ただし、その場合にも、それが医療技術の革新によって、それ自体が操作される場合には

単なる非対称的とは別の問題が生じると思われる。例えば、生命維持装置によって意識が無いのに生存が可能な場合、救命措置の進歩により、「障害」をもつ未熟児が多く生まれる確立が高まる場合、排卵誘発剤によって多胎児が出来、それを制限しなければならない場合、人権・生きる権利はどこまで許容されるのだろうか。

これには、原子力発電と同様に、可能であるが将来にわたる利益を考えてその技術を使わない、ということも現実の問題として考えなければならない。

また現在進行中の問題としては、情報技術の発展にかかわる困難と可能性も見逃すことはできない。たとえばネット技術の発展により遠隔の見知らぬ人とコミュニケーションができ、アバターが自由に用いられる状況では、人間が生身の身体とは関わりなしにコミュニケーションできるようになれば、そのような身体に対する見方（偏見）は意味をなさなくなるかもしれない。しかし、そのようなリアルな身体を欠くコミュニケーションとは何か、が問われることは確かだろう。

\*このことはアマチュア無線をする女性の例としてあげたが、さらにアバターという仮想現実がリアルな現実に移行する可能性も想像することができる。

#### 4) 対自的統合と対他的統合の関係

私は自分を自分自身について考えることができる。これは私の私に対する関係であり、そのような私のありかたをここでは対自と呼ぶこととする。同時に私は他者とも関係を結び、他者に対する私としての対他の側面を有している。つまり私という存在は、対自でありまた対他として存在していることとなる。

では社会における分離は、私における分離とどのような関係にあるのだろうか。あるいはこの二つの分離はどのような関係にあるのだろうか。社会における回復は私における回復に何をもたらすのかだろうか、あるいはそれとは全く別に考えなければならないのだろうか。

まず、私が「身体」の不調を克服して、自信に満たされた気持ちで社会生活を送ることができるなら、少しくらいの差別や偏見も恐れることはない、ということがある。

その人自身における絶対的統合、同一性の確立は、そのことにより、対他的差別自体が存在しつづけたとしても、それは個人に及ばない、ということがありうる。別の言葉でいえば、これは個人的解決ということもできる。たとえば優れた人格や能力は「障害」をもった身体へのまなざしを跳ね返すことができる。たとえばホーキング博士やまばたきの詩人の場合、車いすのダンサーの動きに魅入られる時など、がそうであろう。それらの人を見ると、人々は彼らが「障害者」であることを忘れるのである。

しかし、それは個人の力による分離の解消であって、それはまれな場合であろう。個人には限界があるし、そこに社会における分離の解消が加わらなければならない。社会における

分離が解消されるなら、私における葛藤、分離も大きく解消されることは疑いえない。たとえば顔にあざのある人が、じろじろ見られることがなくなれば、その心痛やストレスはどれほど軽減されるか想像に難くない。

では、その対自と対他の中での分離は相互にどのように結びついているのだろうか。この場合重要なことは社会、あるいは<他>とは因果関係によって結ばれているわけではなく、意味によって結ばれている、ということである。私はさまざまな意味を自分にあたえ、私は何かを問い、私をつくる。また眼差しも、その意味を感じ取る目を通して、その目の意味を読み取る。

ではその間をとりもつもの、媒介するものとは何だろうか。それは私にとっても対象であり、他者にとっても対象であるものとしての、身体あるいは行為に他ならない。つまり私と他者は私あるいは彼・彼女の身体あるいは行為を通してつながっているのである。

すなわち、この身体を通した分離の解消とはどのようなことだろうか。まず「障害」において、身体は<同>における<他>として現れる。

#### ① 私の行動は私をこえてひろがる

私の行動は、私自身にとどまるものではない。私の行動は私をこえてひろがる。私が自分自身に向かい、私が私を深く省察するとき、もしデカルトがその方法序説で述べているように、もっとも確実にいえることとして「私は考える」ということにたどりついたとしても、その行動はデカルトがそれによって外部世界の存在を認めるか否かにかかわらず、社会の人々の考えを変え、社会を変える大きな力となりうる、ということの意味している。

従って分離の克服には二つの道、すなわち、自己の変革からの道と社会の変革からの道があるように見えるが、それは見かけのことであって、社会の変革を支えるものとしての自己の実現があり、また個人により、それが自己の表現であったりする、ということである。そのどちらも主体の働きであることが重要であって、自立運動の主唱者も社会を変えることを自己の主体の、簡単にいえばもっとも重要だとする活動によって、自己を生かしているということである。

それゆえ、安積遊歩が米国で「障害者」が自由に好き勝手にしていることによって、それまでの自己の社会運動がけっして自分のためでは無かった事を知らされ、自分のために生きる決意をしたことが、彼女の社会的活動を放棄することにつながらなかったことをみても理解される。ある意味でそれこそが彼女の社会に対する深い影響であり、深い社会への働きかけとなっていることは確かである。社会の変革、その分離の克服の動きも、その源は決して自己の外に求められるものではなく、自己の内にこそ見出される、ということである。そしてその時、自己における分離と社会における分離の解決への運動は一つのものとなって、

「全人的」に果たされる、ということである。

ただし、その個人の情熱が他者の承認、支持や励ましによって大きく左右されるということは事実であり、この意味でも、対自としての私は対他としての私とその中心・核心において固く結びついているということを忘れてはならない。この意味でどのようにして個人が共に分離を乗り越えることができるかということも重要な課題である。

## ② 連帯の絆を創り出すこと

「障害者」運動において重要な役割を果たしている組織として自助グループの運動がある。それは同じ悩みを持つものどうしの（新たな）結びつき、という意味をこえて、その社会を変えるための普遍的な新たな意味を生み出す可能性がある。新たな<同>による、新たな結びつきによる、分離の克服可能性を探らなければならない。その過程をシュミレーションしてみよう。

第一段階は、その同じ「障害」をもった人の集まりにおける平等である、仲間はその「障害」ゆえに、理解しつながらることができる。その場においてスティグマはスティグマではなくなる。しかしそれを他に及ぼすにはどうすればいいのか。そこで社会全体のシステムの転換が求められる。

第二段階は、その差異が普通であること。すなわちその「障害」はとりもなおさず私の「障害」でもある、という認識である。あるいは人間の身体の有有限性、ということである。また、私が身体をもっている、わたしは「身体」でもある、という事実であり、私は身体を通して、身体によって生きている、という事実である。わたしが対自であり、対他（身体）であるという存在論的位置にある、という事実である。あるいは、私が世界の中に、身をもって住んでいるということであり、私は身体にも住んでいる、私は身体とともに、私は身体である、ということである。すなわちここに成立するのは身体を通しての連帯・分離の解決ということである。

## 5) 創造としての回復と超越

これまで分離の回復（正確には分離からの回復とすべきかもしれない）ということについて述べてきた。では一体この「回復」とはどのような「回復」なのだろうか。それは単に元に戻すということなのだろうか。それとも、もっと別の意味があるのだろうか、ということについて論じたい。

回復すること、統合を実現すること、それは自然的な過程、すなわち因果関係によって行われる過程ではない、ということを私たちはこれまでみてきた。ではなぜそれが因果関係によって説明されつくせないのかといえ、それは個人は「自分」を、「障害」を対象として

感じ、考えることができるという基本的事実によっている。相手を対象としてみとめる、意識するということは、すでにその対象との距離が存在していることを示している。このことは言葉をかえれば、対象からの自由を意味している。この意味で、そこにおける分離は対象とすることの分離であり、分離の中にはすでのそこからの自由、回復の可能性が含まれている。すなわち、そこにおける「回復」とはその差異を、あるいは分離を、対象化したうえでの統合、新たに創り出された「回復」に他ならない。この意味でこの統合とは、対自と対他におけるより高次の統合といえよう。

このことからすれば、リハビリテーションとは人間としての権利の回復というよりむしろ、分離の回復・克服ということになる。あるいは、自立というその行動レベル（次元）の問題とは本質的に異なる使命と目的をもった活動である。つまり社会のあり方を変えるということをその中に含む、きわめて包括的活動ということになる

従ってこの意味で、上田が言及しているように従来の回復・治療としてのリハビリテーションの位置づけも、その全体的あり方から再検討しなければならない。ただし、リハビリテーションはあくまでもまず治療と回復をめざす技術であり、客観的証拠に基づく技術体系である。したがって、そこに自ずから対象や問題による生理的・物理的制約が生じることは当然である。あるいはその境界を意識するところにリハビリテーション的役割があるといつてよい。

これに対して、宗教的解決においては神・絶対者の前の平等、地上的価値から彼岸的価値への移行が生じる。あるいは、むしろ苦難は「神に選ばれたものの証」であるというエリートとしての意識における価値の逆転さえ生じることがある。しかし、この「障害」の超越は神の存在を必要とし、それを不可欠なものとしているわけではない。

それは「障害」にも何か意味があるのではないだろうか、それは何かを人間におしえてくれるのではないだろうか、何かを語ってくれるのではないだろうか、ということである。気にしないから、超越する、という立場もあるが、そこにこだわり、耳を傾けることもできるのではないか、ということである。

たとえば、ジョージ・ルーカスの映画「スターウォーズ」に登場する地球人からみて奇妙な姿をした異星人の堂々としてふるまいをみると、そこに宇宙的視点といったものが存在していることを感じる。

だから、「障害」に対して超越するということは、決して対立や受容や無視や忘却を意味するものではない。それは「障害」はあるが、それは決定的なことではない」という根底的な出来事であり、子どもが見るようにそれを純粋に受け止めることである。この意味において生まれたての子どもは社会を免れている。

したがって、分離の回復とは単なる回帰でも復帰ではない。それは新たなステップ・統合



であり、〈他〉と〈同〉の統一。〈他〉を含んだ（経過した）超越的な〈同〉である。

## 終章 現代社会と分離

現代社会はしばしばさまざまな場面で、たとえば福祉や医療や教育においてしきりに統合を呼びかけてはいるが、このこと自体がいかに統合が難しいかをはしなくも示している。

なぜなら、現代社会は一方では専門家と非専門家、政治家と大衆、非正規労働者と正規労働者などの間の、分離をたえず生み出しているからである。また地域においても、人々が行き交う路地をなくし、広い道路を張り巡らし、街を、人々のつながりを破壊するからである。かつて道路を広げることに反対した古老の心配を、古くさい考えと一蹴した若者がその後、何十年かたってから、その言葉の意味に始めて気づかされ、悔やんでいう話を聞いたことがある。現代とはこの意味でその矛盾がしだいに明らかになりつつある時代である。

ではそれはいかにして解決できるのだろうか。そもそも人間自身が心身統一体の上に成り立つという意味で矛盾を抱えた存在である（本質的矛盾）。しかし、考えてみれば、この身をもつ、ということの中に、受肉の中に人間の本質的は意味があるのではないか。「障害」の中にこそ、人間の積極的な意味を見出すヒントがあるのではないか。（死の中にも意味があるのではないか）

これは分離から学ぶ、自分と社会を問い直す、ということである。離れてはじめてその身と心の意味に気づく。ここにおいて私たちは「障害」という源泉、人間の根底的あり方にふれ、「障害」という根本的矛盾と向き合うことによって、さらにより深く人間について学ぶことができるのではないだろうか。

私たちは、「障害」は身を通して私に達していることを知っている。それは分離であると同時につながりをすでに示していることを知っている。その距離から、私たちの一歩がはじまることを知っている。その距離を広げるか、縮めるか、近づくか、遠ざかるか。それはその一歩の方向によって決まるだろう。それは身の処し方の問題である。足の向きの問題である。その一歩からすべてが、新しい社会がはじまる。

それは融合した社会、全体主義の社会ではない。現実的融合（「障害者」どうしの社会）ではない。それは分離における統合であり、想像の上・意識の上の意識による変革ではない。それは想像の上でも、現実的に事実において「すべては「障害者」である」という意味での統合・融合ではない。「障害」と「健常」がともに成立する、そのような分離を経て生み出された統合、無差別である。それはいわば矛盾の上に成り立つ統合であり、それは創り出される「分離」を超えた関係である。

「障害」問題の克服、それは人々と社会の分離・分断化・孤立化を進める現代社会の根本原理を問いたす試金石であり、スタート台にほかならない。



**参考文献**

- 上田 敏 目で見るリハビリテーション医学 東京大学出版会 1992  
 後藤吉彦 身体の社会学のブレイクスルー 生活書院 2007  
 E. レヴィナス (熊野住彦訳) 全体性と無限 岩波書店 2005  
 H. ベルグソン (合田正人他訳) 創造的進化 筑摩書房 2010  
 H. ベルグソン (合田正人他訳) 意識に直接あらわれるものについての試論 筑摩書房 2002  
 I. カント (波多野精一他訳) 実践理性批判 岩波書店 1979  
 R. B. Brandt (Ed) Social Justice Prentice-Hall 1962  
 西倉実季 「顔にあざのある女性たち」 生活書院 2009

## Disabled Persons and Isolation from Society

KAGAYA, Hajime

Setting standards and definitions of disability is difficult as the word has a very broad meaning. For example a person who experiences difficulty in climbing stairs may be looked upon as disabled, in another country, not so. In this paper I consider the meaning of the word disability in terms of isolation.